

プログラム・ノート

鄭 理耀

ハイドン：ピアノ三重奏曲 ホ短調 Hob. XV:12

1788／89年に作曲され、『3つのソナタ』の一つとして同年ウィーンで出版された。この時期のヨーゼフ・ハイドン(1732～1809)の三重奏曲は、私的な空間での演奏に適した、親しみやすさと多彩な変化を併せ持つ曲調が多いが、本作第1楽章はホ短調の和音で毅然と開始され、緊張感が一気にみなぎる。厳格な主題展開のため、展開部において、このジャンルとしては珍しく対位法の手法が用いられている。第2楽章からはホ長調に移り、陽気で軽快なフィナーレで曲を閉じる。

シェーンベルク(相沢吏江子 編曲)：

6つの小さなピアノ曲 作品19(ピアノ三重奏用編曲)

1911年の作品で、アルノルト・シェーンベルク(1874～1951)が十二音技法を確立する10年前にあたる。最初の5曲はわずか1日で完成し、終曲は数ヶ月後のグスタフ・マーラー(1860～1911)の死に触発されて書かれた。各曲は極端に短く、調と共に形式や動機の展開からも解放された、格言的な簡潔さを持つ。第1曲は即興的な断片が連なり、第2曲では繰り返し脈打つ長3度の響きに支配される。第3曲では対極にあるデュナーミクが立体的な音響を織りなす。続く2曲はレチタティーヴォとアリアのようで、最後にマーラーの死を静かに悲劇的に回顧する。

レベッカ・クラーク：ピアノ三重奏曲

女性作曲家に対する偏見が根強い時代を生き抜いたレベッカ・クラーク(1886～1979)は、両大戦間の英国で最も重要な作曲家と評され、ヴィオラ奏者としても活躍した。コンクールの応募作として1921年に書かれた本作には、第一次世界大戦後の時代精神が色濃く反映されている。第1楽章は激しい切迫感と焦燥感を纏った主題で始まる。これは「モットー」として様々に変容しながら全楽章に登場する。静謐で瞑想的な緩徐楽章では弦楽器の抑制された歌にピアノが寄り添い、第3楽章では希望に満ちた肯定的な終結へと向かう。

メンデルスゾーン：ピアノ三重奏曲第2番 ハ短調 作品66

この世を去る2年前、多忙なキャリアの絶頂期にあったフェリックス・メンデルスゾーン(1809～47)の傑作。古典的な形式とロマン主義の精神を融合させた、晩年の充実した様式を示す。アルペジオを基調とした劇的でエネルギッシュな第1楽章に始まり、『無言歌集』の一曲のような内省的な緩徐楽章、疾走感あふれるスケルツォ楽章が続く。終楽章ではコラル風旋律が現れ、管弦楽的な響きを備えて崇高で壮大なクライマックスを形成する。

(ちよん りよ・音楽学)